

「底が突き抜けた」時代の歩き方 287

戦火の中で考え続けることの意味

ーなぜソントグはセルビア空爆を支持したのか

大江健三郎はスーザン・ソントグへの書簡（『朝日新聞』99・7・13）の冒頭で、ニューヨーク・タイムズ・マガジン5月2日号に寄稿されているソントグの文章の中の、《すべての暴力がひとしく非難されるべきものなのではない。すべての戦争がひとしく不正なものなのでもない》という一節をめぐって、日本の若者たちから、これはNATOの空爆を支持するものなのか、という解説を求められ、次のように答えたことを記している。

《スーザン・ソントグは、ポスト冷戦時代の現象として——さらに、まだ終わっていない、この世紀のファシズムの形態として——ヨーロッパの一国内の戦争に警告を発し続けてきた。ボスニアにおいては、現場におもむいて仕事もした。いまミロシェヴィッチが仕掛けたものを押しとどめるために、他の方法があるか？ 彼女が積み重ねてきた労苦に裏打ちされている苦渋、そして文明全体への深く暗いアイロニーを感じとることなしに、この二行を有効に読みとることはできない。

むしろきみたちは、自分らの国がアメリカの戦略の一環を公式に担ったいま、アジアに起こる、国境に囲い込まれているファシズムの戦争に賛成するか、反対するか、中立はありえぬ以上、新しい第三の道を作り出すことができるか、それを考えてみるべきではないか？ これからの10年、20年の間に「われわれはなぜTOKYOにいるのか」という事態が起こらぬといいきれるだろうか？》

続けて、《私はあなたの評論を誤読しているかも知れません》と謙虚に重ねるが、私の見方では、どうすることもなく彼は誤読することを強いられている。彼の書き続ける場所のなかでは、ソントグの苦渋の一節は、国旗・国歌法制化や周辺事態法案の動きが加速されつつある、日本のファシズム的な傾向に真正面から向き合うなかで受けとめられるべき提言に貶められてしまう。まるで、「ヨーロッパの一国内の戦争に警告を発し続けて」いるソントグの姿に、君たち日本の若者も日本のファシズム化に抵抗することで呼応せよ、といわんばかりのプロパガンダにすぐに墮してしまいかねないのだ。彼女はそんな浅薄なことをいおうとしているのではない。とくに破産している進歩・革新的な枠組みのなかに留まり続けているわけではない。

ソントグがNATOの空爆を支持したそのことに、どんな意味もあるわけではない。遠くの安全地帯からは、セルビア側の反撃の余地が皆無な空爆の残酷さ、おぞましさは

一目瞭然である。だから、空爆反対の声はいつだって容易に上げられる。もちろん、ソクタグの空爆支持の選択を同列に扱うわけにはいかない。彼女の立っている場所と、遠くから声が上がってくる場所とは、そもそも隔絶しているからだ。彼女が問うているのは、空爆支持であれ、反対であれ、その声が起ち上がってくる場所の筈である。その場所のなかでどのような苦渋の選択を自らに迫らざるをえなかったのか、ということだけが問題なのだ。従って、彼女が自らの場所から空爆反対を選択せざるをえないということも、もちろん、ありえた。その選択には彼女自身の考え以上に、彼女がいまそこにいるという場所が大きく伸ばし掛かっていることが重要であったのだ。

ソクタグの立っている場所と切断され、どちらかといえば、遠くの安全地帯から空爆反対の声を朗らかに合唱する場所と隣接している場所に立っている大江健三郎とすれば、場所の隔絶においてもどうしても誤読せざるをえないし、もし仮に場所の隔絶を超えて彼がソクタグの意図を理解してしまうようなことがあれば、彼女の立っている場所をどうしても共有することが不可能であるという点からも、彼女の言葉を誤読せざるを得なくなってしまうのである。彼が「あなたの評論を誤読しているかも知れません」というとき、どこかが違うということに彼に気づかれていたように思われる。このソクタグ宛の彼の書簡にはまた、前号で触れたように、「直接の体験の具体性」とか、「リアルなものの衝撃」、「真剣であること」への彼の誤読が引き続いて開陳されている。

彼からのこの書簡を受け取ったソクタグは、『もちろん、あなたはあの論稿を「誤読」なさっていません。』と優しく受けとめて、問題を避けることなく返信（『朝日新聞 99・7・14』）を行っている。『苦悩と多くの疑いを抱きながらも、確かに私は北大西洋条約機構（NATO）によるセルビア爆撃を支持しました。かつてユーゴスラビアだった地を、スロボダン・ミロシェビッチが破壊し続けるのを食い止めるには、軍事介入しかないと考えたからです。ミロシェビッチが1991年に戦争を始めたその時、もし軍事介入が行われていたら、多くの、実に数多くの生命が失われずにすんだことでしょう。あの地域全体の物理的、経済的、文化的な破壊も阻止できたでしょう。』

91年、セルビア人たちは、ダルマチア海沿岸の美しい古都ドブロブニクを砲撃しました。そこはかつてユーゴスラビアの一部だったのですが、今は新たな独立国クロアチア領になっています。しかし、当時は何の手も打たれませんでした。ヨーロッパの主要諸国はバルカン地域に広がる惨状に背を向け、事態の悪化とともに間もなく、45年以来初めての、ヨーロッパの地における死の収容所がいくつか出現しました。そして恐怖は続きました。

そうです。あまりにも多くの残虐行為を承認してきた、バルカンの戦争実行者、独裁者の動きを封じ、できれば倒す試みをするという、あの遅すぎた決定を私は支持しました。NATOが戦争をいかに遂行したか。自分たちの側の軍隊をリスクにさらさないで死傷者や損害を制限し、地上の民間の損害を最大限引き起こす、そのやり方は当時も今

も私は支持していません。また今回のNATOの作戦（「成功」とはほど遠いものでした）が、ヨーロッパ諸国の軍事予算拡大を望む連中を刺激し、そのもくろみを促進させる確率が大きいことも、嘆かわしいと感じています。

ここで私自身の立場をできる限り明らかにしようと思います。なかには正義の戦争だとみなしうる戦争も、きわめて少数ではあれ、たしかにあります。戦争という手段をとらなければ、武力による侵略をやめさせる道がないという場合に限って。

しかし、それでも、戦争は犯罪です。今まで三度にわたりまづかに戦争を見てきました——68年と72年にベトナムで、73年にイスラエルとシリアで、そして93年から95年にかけてボスニアで。繰り返し申します、戦争は犯罪です。でも対立は存在するのです。不正も存在します。殺戮は行われています。自分たち以外の共同体のメンバーのほとんど、または全員を殺害すべく、人々は動員されてしまうのです。そこで、人は何をなすべきでしょう？

もちろん、人間があくなく続けてきた行為である戦争の撤廃は、文明の生んだ崇高な、もっとも崇高な大望です。戦争を嫌悪する心は、文明化された人間の証です。でも、大望や嫌悪の心があるからといって、人間が喜んですべての戦争を捨て去る段階に現実には到達したというわけではありません。

こう申し上げているからといって、「理想主義」のまぎれもない魅力にあらがって「現実主義」の薄汚れた主張を弁護しているわけではありません。（…）私は善意に満ちた美辞麗句にはしる誘惑を振り切って、英知の声を弁護しているのです。人間の現実についてあまりにも一般化された認識を排して、もっと具体的な認識を弁護しているのです。》
《ドイツの緑の党のリーダーの一人で、現在は同国の外相であるヨシユカ・フィッシャーは、ミロシェビッチに対するNATOの軍事行動に、ドイツが限定付きの参加をすることを擁護しました。ヨーロッパ諸国のなかでも、NATOの行動への反対意見はドイツ国内において一番強かったのですが。私は彼のとった立場に感銘を受けました。

良心の声を正直に告白する政治家。その意味でフィッシャーは希有な存在です。だからこそ、彼の内省を私たちは真摯に受け止めるべきだと思うのです。つまるところ彼はこう語りました。

ナチズムが敗退してこのかた、われわれ「善良なドイツ国民」は二重のスローガンのもとに政治的な思考を組み立ててきた。これ以上戦争は起こさない。これ以上アウシュビッツは起こさない。しかし今、苦痛とともに自覚せざるをえない。戦争それ自体がアウシュビッツ、つまりジェノサイド（大虐殺）を引き起こすのではないということを。場合によってはアウシュビッツを阻止（あるいは抑止、または停止）するには、たった一つしか方策がない——それは戦争だ——ということ。

NATOがセルビア上空で軍事行動を展開していた期間、たまたま私は南イタリアの都市バリに長期滞在していました。アドリア海を隔ててアルバニアに面している街です。

そのバリでも数回の反戦デモで、同じスローガンの看板を目にしました。「戦争をやめよ。ジェノサイドをやめよ」。抗議していた善意の人々は、これらの二つのアピールは、合わせれば同じ主張になると考えていたに相違ありません。しかし、そうはならないのです。私は、こう考えざるをえませんでした。だれが戦争を起こしているのか、だれがジェノサイドに手を染めているのか。戦争停止によって、セルビア側によるジェノサイドがまんまと続けられるだけの結果になってしまったら……。

かりにNATOが戦争を否定していたとしたら、それはコソボの人々にとって、どういう事態を意味していたでしょう——助けは来ない、ということです。ボスニアの人々がセルビアとクロアチアの侵略者の攻撃にさらされていた——殺され、爆撃されていた——3年の間、結局NATOが彼らに伝えたメッセージは、助けないということだったのです。

何事かをしない、つまり無為。それもまた行為なのです。

もう一つ、アジアの例証です。クメール・ルージュが行った恐怖のジェノサイドを終わらせたのは、ベトナムによるカンボジア侵攻でした。バルカン地域におけるNATOの行動（アメリカが言いだし、先頭に立ち、また大部分を実行した行動ですが）とは異なり、ベトナムはカンボジア侵攻の口実として「人道上の」理由は持ち出しませんでした。それはたぶん、ベトナムの拡張主義によるいつも通りの出来事だったのでしょう。とはいえ、一つの結果として数百万の人々の絶滅が唐突に終わりました。もしベトナムがカンボジアに侵攻していなかったら、あれ以上どれほどのカンボジア人が殺されることになったでしょう。

私たちははたして正直に——人間として、と言ってもかまいません——ベトナムのカンボジア侵攻はなかったほうが良かった、と言えるでしょうか。》

ソントグがセルビア爆撃を支持する苦渋は、コソボにおけるセルビア側によるジェノサイドを停止させるのに、「自分たちの側の軍隊をリスクにさらさないで死傷者や損害を制限し、地上の民間の損害を最大限引き起こす」という、彼女自身支持しないNATOの空爆のやり方によってしか、ありえなかったという唯一の選択からやってくるのだ。空爆でセルビア人を殺戮する方法によってしか、セルビア側によるコソボのアルバニア系住民に対する大虐殺を止めさせることができなかったということである。それでも、彼女はNATOによるセルビア空爆を支持しないわけにはいかなかった。なぜなら、NATOがセルビアに爆撃を行わなければ、コソボのアルバニア系住民に対する大虐殺は続行していたからだ。支持しないやり方であったとしても、セルビア側によるジェノサイドを止めるには、それしか選択はありえなかった。NATOが介入しなかったために、3年もの間ボスニアの人々は「セルビアとクロアチアの侵略者の攻撃にさらされて」、虐殺されつづけてきたという深い悲しみが、ソントグの胸中にずっと巣くっていたのだ。『毒を盛って毒を制す、という言葉がある。セルビア側によるジェノサイドの毒を制す

には、NATOによるセルビア空爆の毒を以てするしかないということだ。ただここで注意すべきなのは、毒を制す毒のほうが大きく上回らないように気をつけることである。NATOによる空爆への反戦デモが決定的に見落としているのは、空爆される側のセルビアによるジェノサイドに対する抗議行動であり、そのジェノサイドを即座に停止させる力の在り処である。反戦デモが能天気なのは、一方の悲劇を片側の目だけで見て、他方の悲劇にはもう片側の目を閉ざしているからだ。両方の目で二つの悲劇を同時に見たとき、あなたは何をなすべきか、「そこで、人は何をなすべきでしょう？」とソントグは問いかけているのである。少なくとも彼女は反戦デモのような欺瞞を冒していないし、またNATOによる空爆を手放しで支持しているわけでもない。どちらを向いても地獄の現実のなかに身を置いて、彼女自身も毒を食らう覚悟で、二者択一の中に飛び込んでいる姿がそこに浮かび上がってくる。

ソントグがギリギリの選択を苛酷に迫られる場所に身を置いて、発言していることがこちらに伝わってくるが、その場所はいくまでもなく、「セルビアとクロアチアの侵略者の攻撃にさらされてい」るボスニアの人々が生活している場所にほかならない。生と死が隣り合わせになった、人間の生命のかたちが剥き出しにされていくギリギリの生活の場所とみなされる。そういった場所に身を置くことによってしか、見えてこないものがあるし、そこで見えてくるものは根本的で重要であるとしても、彼女がベトナムであれ、ボスニアであれ、そうした砲弾が飛び交い、生命が危険に晒される戦火の真っ只中に身を置こうとするのは、どのような作家としての立場においてであるのか。セルビア軍に包囲されたサラエボでベケットの『ゴドーを待ちながら』を上演し、そのときの手記の表題が「サラエボでゴドーを待ちながら」であったように、〈ゴドー〉がやってくるのを最も切実に待ちかねているサラエボで、ゴドーが遂に現れない『ゴドーを待ちながら』を上演するそこに、ソントグの表現の意図がこめられているとして、〈ゴドー〉を待ちつづけている町に彼女が足を踏み入れるのは、どうしてなのか。

「身をもって目撃すること、参加すること」を掲げるソントグは、評論家の浅田彰を相手（『SAPIO』94・9・22）に、まず自分が目撃し、参加しつつある場所についてこう語っている。

《人々は巨大な強制収容所に閉じ込められているようなものです。サラエボには戦前60万～70万人が住んでいたのですが、多くの人々が去り、多くの人々が殺された後、今もなお、推計にもよりますが、40万人ほどの人々が住んでいます。彼らは逃げ出すことができず、1945年のベルリンや東京とあまり変わらないように見える廃墟の都市に暮らしているのです。多くの人々がこういう廃墟の映像をテレビで見て、「あの空っぽになった廃墟を見ろよ、なんてひどいんだ」と言う。実のところ、その廃墟は空っぽではなく、人々が中で暮らしているのです——暖房もなく、窓ガラスもなく、電気もなく、水もなく、わずかの食料しかなく。それは世界最大の強制収容所なのです。》

《(…) 包囲が近い将来には終わらないだろうと誰もが気付いていることです。実際、包囲を解くことはどちらの利益にもなりません。包囲が解かれれば誰もが脱出するだろうけれど、(…) 戦争全体が解決されてはじめて包囲が終わるでしょうが、私は率直なところ数年中にそういう解決が可能だとは思いません。サラエボの人々は何年も今の状況に閉じ込められたままだろうと思うのです。》

《町をおおっているムードは疲労感です。誰もが芯から疲れきっており、そう口にします。停戦以来、疲労感がますますつのってきた感じさえする。実際、これは私自身が経験したことなのですが、停戦前、昼夜を問わずいつ殺されるかも知れないという意識が、ある種のエネルギーを維持するのに役立っていたんですね。その緊張感が去り、しかし包囲が終わる見通しもたたない今、人々は本当に疲れきっています。》

そして、《私は状況に関して完全に悲観的です。それでも、あるいは、だからこそ、私はサラエボに行くのです。自分にできるわずかのことをするために。》と、ソングは語り、なぜ、サラエボに行くのか？ という問いに答えようとする。《私にとってサラエボに行くことはきわめて個人的な決断だということです。いや、決断と言うよりも、良心の呼びかけであって、私はサラエボに行かずにはいられないのです。》

その上で言えば、私はサラエボで、自分にとって有益である以上に、サラエボの人たちにとって有益なことをしようと努めてきました。サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を演出・上演したのもそのために、サラエボの状況のなかでこの劇を舞台にかけることには特別な意味があると思ったからです。それは、現地の状況をドラマ化し、世界の注目を集めるという意味でも、有益でした。》

すると、「サラエボの人たちにとって有益なことをしようと努め」ることは、絶望的な状況の中で希望の明かりを灯すことなのか。彼女は決然と答える。《サラエボをめぐる客観情勢に何の希望も持っていませんし、もちろん自分が希望をもたらし得ると思っています。自分がサラエボ市民だったら何の希望も持てないでしょうから、私はそんなことを言える立場にいないのです。それでも、何ひとつ起こっていないよりは、何かが起こっているほうがましだろう。私はそんな何かをするために行くのであって、希望を与えに行くのではありません。(中略) それは状況全体を変えはしないのです。》詰まるところ、《そう、私は個人としてできるだけのことをするまでです——絶望的な現実のなかにあっても。》というところへ行きつき、その場所からどこへでも彼女は押し出されていこうとする。

どうせ「状況全体を変えはしない」個人など所詮非力だから、何をしても仕方がないのではなく、どんな「絶望的な現実のなか」であろうとも、いや、だからこそ、「個人としてできるだけのこと」を最大限探しつづけようとする生きかた、思想のありかたが、そこに見出される。自分のできることが無益に包囲されているサラエボ（アフガンと読みかえてもよい）の人たちにとって有益でさえあれば、というのが彼女の心からの

願いなのだが、彼女のそのような生きかたが彼女をサラエボへと飛び込ませるとして、そんな彼女の背中を強く押しつづけるものは一体、何なのか。「良心の呼びかけ」だと答えている。不正と不公正が渦巻く中で人々が膨大に犠牲に晒され、全く無意味に命を奪われていく状況に素知らぬ振りをして、黙って通り過ぎて行け、とあなたがたはいうのか、という声がそこから鳴り響いてくる。

もちろん、ソントグなら、多くの知識人や作家たちがそうであるように、サラエボに行かなくとも、彼女の居住するニューヨークの地でサラエボについての何らかの発言を行い、アメリカ政府の介入を求める運動を組織することができるかもしれない。しかし、彼女はそんな遠回しなことよりも、「サラエボの人たちのためにできるいちばん有益なことをしたいと思って」、そこへ飛び込み、自分にできることを最大限見出すことを選択するのだ。それは、つねに戦乱の地に赴かなければ何もできないのか、ということでもなければ、自分の立っている場所でサラエボに匹敵する課題を見出して取り組み、ということでもないと思われる。ベトナムやサラエボが戦火に見舞われているから、矢も楯もたまらず飛んで行くのではなく、彼女はいつも自分の場所で〈戦火〉をかかえこんでいるからこそ、自分の足元の〈戦火〉が彼女をたえず戦乱の地へと赴かせずにはおかないのだ。というより、彼女が終始たたかいつづけている〈戦火〉にとって、ベトナムやサラエボもまた、その〈戦火〉が目に見えて拡大している地域にほかならないということだ。自分の〈戦火〉とさまざまな地域における戦火とが重なり合ってしまうのである。だから、彼女はいつでも、どこでも、そこで自分が最大限にできる有益なことはなにか、と考えつづけているそのままの姿勢を、赴いた場所に向か合わせてしまうのだ。おそらく自分が考え、発言し、なにかを表現しつづけるのは、そうした関係をつくりだすなかでこそ最大限に発揮される、と彼女がいおうとしているのが感じられる。「直接の体験の具体性」とは、そういうことではないか。想像力を広げるなかで目にみえない関係性を追いつづけるよりも、目にみえない遠い関係性を自分の目の前にたぐり寄せてくるなかで、なにか有益なことを表現しつづけていきたいというのが彼女の立場であり、そこには具体性への手触りからますます遠く離れて、抽象的な表現行為のなかに埋没しつつある同年代の作家や知識人に対する批判がこめられているのが、明らかに感じられる。

2002年3月5日記